

せいげん 宮平盛彦さん

1930(昭和5)年9月生まれ

当時の本籍地 沖縄県

陸軍

所属 第32軍 電信36連隊
第6中隊

戦地 首里、山城・摩文仁(糸満市)、
津嘉山(南風原町)



●1945(昭和20)年3月28日、14歳で入隊。1メートル45センチの二等兵

部隊名は、正式の名前は忘れました。32軍直轄の球部隊の無線通信隊に配属されました。私ら1中六期生は100名位で、4班に分けられ、私は第6中隊に配属された。6中隊は南風原(はえばる)町字本部(もとぶ①)にありました。学校から夕方入隊して、その日に二等兵の星をつけて、背丈が1m45cm位の兵隊ができたわけです。(笑)

●3月29日、首里(②)の無線通信隊の分隊に派遣

翌日、学友と一緒に、首里城近くの無線通信隊の分隊に派遣になりました。その頃の仕事は、僕らは、最下級の尻ですから、二等兵ですからね、「飯あげ」といって食事の仕事で、近くに軍司令部の大きな炊事場があって、そこに朝と夕方、ご飯をとりに行くという雑用と、伝令だったです。首里城の横に大きい階段あるけど、そこに軍司令部の入り口があった。そこに大きい池があって、そこに通信隊の指揮所があって、伝令はそこで待ってるんです。爆撃などで電話線が切れたりすると伝令します。僕らは通信教育を受けてなかったから通信はできなかったですからね。

●4月1日 米軍沖縄本島に上陸

●4月20日、母親と姉と会えた。それが最後

敵が南風原まで攻めて来て、学徒兵は首里城の近くにたくさんいるという話をきいて、母と上の姉が、ぼくを探しにきた。たまたま、ぼくが伝令の帰り、砲弾をよけて壕に隠れたら、母と上の姉に会えた。ほんとに奇跡的なことだと思ったですね。隊長にあってもらったら撤退するからと言われ、母も「よろしくお願いします」と言って別れ、それが最後でした。山城と摩文仁の間にある大渡(おおど)で、家族が全滅したと聞きました。家族は父と母に、姉と妹。

●5月24～28日頃か、山城(やまぐすく③)へ撤退

首里から摩文仁へ撤退すると指示があって、われらは南風原分隊に返されました。北部にあった通信隊はまわりをアメリカに囲まれているので、兵隊達はそれを突破して摩文仁に向かったわけです。南風原分隊が撤退した山城(やまぐすく)の壕はひめゆりの近くで、もう、みんな首里からそちらに撤退していて、そこらじゅう敵だらけで、その撤退した壕へわれらいったんですが、杖ついて歩いている人、這って行く人、動けない人は注射や青酸カリで始末されて・・・そういう悲惨なものを目にしました。

あのころは1本道しかなくて、爆弾で襲われても、飛行機から射撃があっても逃げられずに、そろそろ歩いていて、雨季だから、ぬかるみの中どんどん倒れていった。ぼくら学徒隊は30名位で歩いていた。通信の荷物持って、畑のあぜ道沿い周り道したり、射撃があったら、道の端や畑に逃げて・・・司令部のあった摩文仁を通り越して、山城に全員ついてその壕に落ち着いて、そこで、壕の外へ物を捨ててに行った一人がやられて死んだ。5月30日頃かな。

●6月初め、摩文仁(④)に移動

食糧を取りに摩文仁へ2、3回往復したりして、6月初めごろ、摩文仁に移動した。

●6月下旬、解散命令

ここからは各自の判断ということで、僕ら摩文仁で別れたわけです。北部に集まって、反撃しようとしていた。生き延びようとは思わなかった。学生の一団20名～30名で、兵隊に引率されて移動しようと、山で休憩していると、砲弾の直撃があって相当死んだ。壕を出たらすぐやられて驚いたです。

広島の人で坂元という30歳位の曹長が、「どうせ君はもう一人なんだから、一緒に広島へ行こう、本土へ行こう」と言ってくれて、僕も一人じゃとても動けないので、いいですよってことで、海岸ペリに下りて行くと無数の死体が波打ち際に打ち上げられていました。そこは喜屋武岬(きやんみさき⑤)の先端で、10m ぐらいの崖の中腹あたりに入れそうな壕に隠れたりしていたんだけど、昼間は攻撃されて危ないもんですから、歩かないで、夜、上に乗って、熱帯のヤシの木みたいなアダンの木が密集したジャングルみたいな所に隠れて。(2013年2月7日)

●8月15日夜、東風平(こちんだ⑥)の壕から、米軍の祝砲が見えた (別のパネルに続きます)